

2023年度 U12ブロックD・C マンツーマン推進 講習会

～マンツーマン推進における次なるステップ～

JBAマンツーマン推進プロジェクト・ユース育成部会
牧野 広良

向上する指導者

「人間力」なくして

競技力向上なし（JOC）

- ▶ インテグリティを考えよう
- ▶ プレーヤーズセンタード
 - ・ マンツーマン推進
 - ・ 人間力の向上
 - ・ 正しい技術

☆常に自己変革のための学びを⇒向上心

『正しい目的のための手段』

素晴らしいコーチング

▶ プレーヤーのやる気スイッチ

- ・正しい方向性に導く
- ・言葉かけ
- ・時に優しく時に厳しく
- ・プレーヤーの特質と特性

▶ 自己啓発に努め、効率的な指導法をする

- ・正しい技術
- ・充実した時間
- ・環境の整備（人・チーム・場所）

育成マインド

⇒ 「個々の成長を成果の中心と
するコーチマインド」

- ・ プレーヤーズセンタード
(コーチのレスポンスビリティ)
- ・ 育成至上主義と勝利至上主義の間に

育成マインドに則り、子供たちに笑顔を！

マンツーマン推進の有効活用

▶ 今までのフェーズ

- ・マンツーマンのとゾーンの違いの認識
- ・マンツーマンをすることの意識
- ・黄色旗を教育的に上手に利用
- ・基準規則の遵守

▶ これからのフェーズ

- ・ゾーンディフェンスに対しての旗
- ・マンツーマンの前提の徹底
- ・バスケットボール I Qの高まり
- ・カテゴリー連携の視野の広がり
- ・基準規則の遵守

MCの技術講習(以下緑色スライドより)

- ▶ 基準規則の理解
 - ・ポイント
 - ・留意点
- ▶ 動画から
 - ・よくあるケースに確認
 - ・次なるステップに向けて
- ▶ 質疑応答

1. マンツーマンディフェンス導入の前提及び 判断基準

【前提】

- (1) 子どもたちがバスケットボールを行う楽しさを担保することが大前提である。
- (2) マンツーマンディフェンスを行う事が大前提である。

【判断基準】

- (1) MCは「ゾーンディフェンスをしていると判断」した場合に「黄旗」の警告を掲げ、改善されない場合は「赤色旗」を上げる。

2. トラップ・予測に基づくプレー

(1) トラップ

- ① オンボールトラップは可能
- ② マンツーマンが前提
- ③ トラップを積極的に用いることの目的は何であるか考慮する。

(2) 予測に基づくプレー

- ① マンツーマンディフェンスを行なっている前提において、予測に基づくプレーとコミッショナーが判断した場合、基準規則違反とは見なさない。
- ② 予測に基づくとは、予測の根拠となる動きがあることを示す。

3. 黄旗と赤色旗の意味

- (1) これまでは「教育的な意味」であり、「理想的なマンツーマンディフェンスの状態以外であれば、瞬時的な状況を含め、全て違反行為とみなし」黄旗をあげることにしていた。これからは「警告的な意味」とし「ゾーンディフェンスをしていると判断した場合、赤色旗に移行するまでの警告として」黄旗をあげることにする。
- (2) 明らかなゾーンディフェンスである（と判断される）場合に赤色旗となる。ゾーンではないがマンツーマンとも言い難い状況がある場合は、これまでは黄旗対象であったが、積極的に黄旗をあげない。予測に基づくプレーを許容するためである。
- (3) ただし、勝利を目指すことを優先するなどの考え等で指導者は、「予測に基づくプレーを許容」を悪用するべきではない。

4. 基準規則前書き

(1) 2022年改訂に至る経緯と改訂の目的

「子どもたちがバスケットボールを楽しめる環境作り」を再考し、「バスケットボール本来の在り方に近づけること」を目指すことを改訂の目的とする。この改訂により、ゾーンディフェンスを許容する事に戻るということではない。

(2) マンツーマンコミッショナー設置の目的

マンツーマンコミッショナー設置の主な目的は、マンツーマンに対する理解を推進し、円滑に試合運営を行い、子どもたちがよりバスケットボールを楽しめる環境を構築すること。

(3) マンツーマンディフェンスとは

マッチアップの状況からポジショニング・ビジョンが適切ではない状況が生じた場合、組織的、意図的でなければ個人のミス、技術不足、判断であると見なして、瞬間の現象を捉えるだけではゾーンディフェンスであるとは見なさない。

(4) ゾーンディフェンスとは

- ①ディフェンスプレイヤーが特定のマッチアップを意識せず、組織的、意図的にエリアを守ること。
 - ②マークマンの動きに対して、適切なポジション対応をしていない（例：マークマンについていかないこと）状況が継続的に行われていること。
 - ③マークマンの動きに関係なく、ボールマンを守り続ける状態。
 - ④隊形を問わず、5人・4人・3人・2人・1人がエリアを守るもの
- *マッチアップが明確ではない状態が続くディフェンス
(例:トラップを続ける中で途中エリアを守る等)

5. 基準規則

(1) マッチアップ

①ディフェンス側プレーヤーは、次の方法等により、マンツーマンコミッショナーにマッチアップが明確にわかるようにすること。(1-2-1)

あ) アイコンタクトや言葉のサイン

い) 指差しなどの手のサイン

う) ボールやオフェンス側プレーヤーの移動に合わせ、ともに位置を移動している

②ディフェンスを始める位置は定めないが、3ポイントラインの内側を目安とするマッチアップエリア内では、このマッチアップのルールが常に適用される。(1-2-2)

③マンツーマンコミッショナーが、5人のディフェンス側プレーヤーが個々のマッチアップを意識せず、組織的、意図的にボールマンのプレーを守っていると判断した場合は、注意や警告の対象となる。(1-3-1)

(2) オンボールディフェンス

- ①ディフェンス側プレイヤーは、ボールとリングの間に位置し、マークマンから1.5メートル以内で、マークマンのシュートチェックができ、1対1のドライブを止められる距離を保つこと。(2-2-1)
- ②オフェンス側プレイヤーがボールをレシーブしたとき、ディフェンス側プレイヤーは、ボールをコントロールしたマークマンをピックアップしていることがマンツーマンコミッショナーに明確にわかるよう、上記の位置と距離にポジションチェンジをすること。(2-2-2)
- ③オンボールディフェンスは、マッチアップし、ボールマンのシュート・ドリブル・パスを制限しようとする事。 (2-3-1)

(3) オフボールディフェンス

- ①ヘルプサイドのマークマンにマッチアップするディフェンス側プレーヤーは、片足または両足がヘルプサイドに触れていること。ただし、ヘルプまたはトラップに行く場合を除く。(3-2-4)
- ②オフense側プレーヤーの動きに合わせて、ヘルプ、ヘルプローテーション、トラップを行ってよい。(3-2-5)
- ③オフense側チームが1人のプレーヤーだけでオフenseを行うことが明らかなき、オフボールのディフェンス側プレーヤーは、マークマンを少しでも捉えていれば、常に移動していなくても、注意や警告の対象とはしない。(3-3-4)
- ④マッチアップの状況からポジショニング・ビジョンが適切ではない状況が生じた場合、組織的、意図的でなければ個人のミス、技術不足、判断であると見なし、瞬間の現象を捉えるだけではゾーンディフェンスであるとは見なさない。(3-3-6)

(4) ヘルプディフェンス

- ①オフense側が有利となる攻撃があると予測できた場合、ヘルプすることは可能とする。(4-3-1)

(5) トラップディフェンス

①オンボールのオフENS側プレイヤーに対して、複数のディフェンス側プレイヤーがボールを奪うことができる距離に接近してディフェンスすることを「トラップディフェンス」という。(5-1-1)

【補足】トラップディフェンスの定義：ボールをスティールできる距離における数的優位な守り方

②ディフェンス側プレイヤーは、オンボールのオフENS側プレイヤーにトラップディフェンスをすることができる。(5-2-1)

③ディフェンス側プレイヤーは、オフボールのオフENS側プレイヤーにトラップディフェンスをすることはできない。ただし、制限区域内において、予測に基づいてオフボールのオフENS側プレイヤーをトラップすることはできる。(5-2-2)

④トラップディフェンスの後、ディフェンス側プレイヤーは、直ちに自分のマークマンに戻るか、ローテーションを行い、マンツーマンコミッショナーにマッチアップが明確にわかるようにすること。(5-2-3)

- ⑤スローインをするプレーヤーにマッチアップするディフェンス側プレーヤーは、制限区域内のオフボールのオフense側プレーヤーにトラップディフェンスをするために、マークマンから1.5メートル以上離れることができる。(5-2-4)
- ⑥**全ての場面においてボールをコントロールしているプレーヤーへのトラップは許される。**
(5-2-5)
- ⑦ヘルプディフェンス後に、オンボールのプレーヤーに対してトラップディフェンスになってもよい。(5-2-6)
- ⑧**マッチアップするオフense側プレーヤーの力量が低い場合、距離に関係なくトラップに行く行為は、育成の観点から不適切であり、行わせるべきではない。**(5-2-7)
- ⑨連続的にトラップが行われる場合、トラップからボールのあるところへのトラップはよいが、エリアに戻ってからトラップを仕掛けることは違反行為と見なす。(5-3-3)

(6) スイッチ

- ①ボールを保持していないオフense側プレーヤー同士をマークしているディフェンス側プレーヤーのスイッチはエリアを守る目的であると判断された場合、違反行為と見なす。
(6-2-2)

(7) プレスディフェンス

- ①プレスディフェンスであっても、マッチアップの基準に合致したディフェンスでなければならず、様々なゾーンディフェンスまたはコンビネーションディフェンスを行ってはならない。(7-1-1)
- ②プレスディフェンスを開始する位置は、フルコート、3/4コート及びハーフコートなど、どの位置であってもよいがマッチアップエリア以外において、チームとして個々のオフェンス側プレイヤーに対してピックアップするディフェンスを行う場合は、スローインするオフェンス側プレイヤーにマッチアップしなければならない。(7-1-2)
- ③プレスディフェンスの際、ボールをコントロールしているオフェンス側プレイヤーをトラップすることはできるが、トラップ後はコミッショナーにマッチアップが明確にわかるようにすること。(7-1-3)
- ④プレスディフェンスをする際には、マッチアップが行われていることが必要である。(7-2-1)
- ⑤スローインするプレイヤーをマッチアップするディフェンス側プレイヤーがエリアを守っていると判断された場合、違反行為と見なす。(7-2-2)
- ⑥マッチアップするオフェンス側プレイヤーがいないが、マッチアップエリア内に戻っているディフェンス側プレイヤーがいることは構わない。(7-2-3)

(8) 予測に基づくプレー

- ① マンツーマンディフェンスを行なっている前提において、予測に基づくプレーとコミッショナーが判断した場合、基準規則違反とは見なさない。(8-1-1)
- ② 予測に基づくとは、予測の根拠となる動きがあることを示す。(8-2-1)
- ③ マークマンを意識せずにエリアを守ることはマンツーマンの趣旨に反するため違反行為とみなす。(8-2-2)

6. 処置と罰則

(1) マンツーマンペナルティの罰則

①1回目の赤色旗は警告でありマンツーマンペナルティは記録されないが、罰則として相手チームにボール保持が与えられる。ボールの保持が変わらなかった場合（アウトオブバウンズ、ディフェンス側のファウル、ディフェンス側のキックボール）は事象の起こった近い位置からのスローインとし、それ以外は相手チームのフロントコートのスローインライン

（U12ではスコアラズテーブルの反対側のセンターラインの延長線上）からのスローインでゲームを再開する。（9-1-3）

②ただし、アンスポーツマンライクファウル・ディスクォリファイファウルなど、フリースローの後にディフェンス側のボール保持から再開するケースはファウルの処置を優先する。（9-1-4）

(2) 第4クォーターおよびオーバータイムの処置

- ①1回目の警告の場合は、そのまま速やかにゲームを終了し、必要に応じてゲーム終了後に当該チームのコーチに対して違反内容を伝える。(12-3-1)
- ②2回目以降の警告の場合は、マンツーマンペナルティの処置を行った後、状況に応じて対応する。トーナメント戦でフリースローを行っても勝敗に影響がない場合は、マンツーマンペナルティは記録するが、罰則を適用しないこととする。(12-3-2)

(3) 1回目の警告でマンツーマンペナルティとなる場合

- ①第4クォーターおよびオーバータイムにおいて、ゲームクロックが残り2:00以下で止まった際の警告については、1回目でもマンツーマンペナルティ(スコアシートへの記載+フリースロー+スローイン)とする。(13-1-1)
- ②マンツーマンコミッショナーが意図的なイリーガルディフェンスであると認めた場合は、どの時間帯においても、1回目の警告でマンツーマンペナルティとすることができる。この場合は、「黄色(注意)」の旗を省略することもできる。(13-1-2)

7. 具体的事例研修（動画より）

1. 映像からの考察

- (1) 新ルールと旧ルールの違い
- (2) 旧ルールで消化しきれてない事象
- (3) 新ルールで予想される事象

2. ディフェンス力の向上に伴う

オフense力の向上

ご清聴 ありがとうございました

2023年(令和5年)

U 1 2 ブロック育成センター

『マンツーマン推進講習会』

日本バスケットボール協会
マンツーマン推進プロジェクト・ユース育成部会
牧野 広良